

能楽奉納くるす桜記念

妙見法楽連歌 歌仙

宗匠 竹島一希 執筆 清水春美

令和七年八月三日張行 八月七日奉納

賦何路連歌

〈初折表〉

山里も秋のはじめや蟬の声
夕闇迫り聞く踊唄
藍にしむ袖を照らせと月待ちて
海路はるかに漕ぎ出づる舟
たてばまたくだけで波や凍るらん
ながめてしばし濃き冬の虹
裕雄 一泰 純一 千恵 一希 春美

〈名残折表〉

青空にいくつの鳥を眺むらん
てもちぶさにゆきつもどりつ
さぎ草の気ままな顔にゆれるさま
音信はあり帰る意はなし
思ひわび言霊ひとつまたひとつ
誓ひしことを忘るるやなぞ
大雪に庭の松が枝折れにけり
しのわきの山春遠からむ
ゆきゆきて古今伝授の村につき
掬むすびし水の喉のどうるほす
出で初むる月の凄さにおどろきて
身ぞ消えやすき露とをのく
和也 春美 史朗 広隆 千恵 一希 裕美子 大樹 史朗 一希

〈初折裏〉

離れ屋に一日を永く送りつつ
かすかな風の音におどろく
振り向けば君の吐息に肩ふるへ
走り去る影手をふれもせず
暑き日のふたりしづかに舞へる夏
夾竹桃の咲き暮るる月
外つ国の人の多きにとまどひて
都に響く古寺の鐘
訪へば守ることもなき庭のいろ
風いざなひて蝶まよひこむ
淡雪のごとくに散るか花むしろ
霞の衣かくす山もと
広隆 裕美子 愛子 純一 広隆 裕美子 瑞希 純一

〈名残折裏〉

ふきぬけて薄すすきをなづる秋の風
あはれを添ふる鈴虫の声
夕暮れに煙たちたる里の家
雲の流れに目をうばはるる
咲きみつる花も明日へと心ざせ
平らかな春願ふ御前
瑞希 純一 和也 基仁 千恵 春美

鶴崎	裕雄	一	竹島	瑞希	三
熊田	一泰	一	今津	和也	三
栗田	純一	四	大津	史朗	二
渡邊	千恵	四	若山	誠	一
竹島	一希	三	原	大樹	一
清水	春美	三	小野江	基仁	一
三田村	広隆	四			
河尻	裕美子	三			
三浦	愛子	二			